

畏敬と尊厳(その2)

宮澤 健

現代人は大事な何かを分かっているのか、無視して生きているのかも知れない。そのせいで何でも馬鹿にできる姿勢ができてしまったのではないか。時代が畏敬を失っている。大いなるものや超越の存在を、感じられない、そんな文化では深みや真の豊かさを持てるわけがないと思う。

バーチャル化の激しい今、子ども達は現代の社会にリアリティを感じにくくなっているのではないか。茶番の社会を生きざるを得ない空虚や苦悩は深いものがある。いじめに流れるしかない事情があるのかもしれない。脱皮や変容の必要に対して、儀式が設定されない状態は、死んで生まれ変わることができない永遠の命を与えられた人魚や、陰陽師に出てくる妖怪の悲しさ、苦しさに通じるのかもしれない。現代人は、彼女達に共通する深い孤独を抱えているように感じる。

現代人のところに、超越や大いなる存在に対する畏敬を取り戻すことは、人間の尊厳のために必要だと思う。超越や大いなる存在は、古代には森にあり、中世には神や精霊にあったり、近代になって国家にそれが移り、現代では権力機構や企業にそれがあろう。今では畏敬の対象は六本木ヒルズにあるのかもしれない。現代の畏敬の森は、精霊の場ではなく、立派な成りはしているのだがどこか笑ってしまいそうになる愚かさを十分に持っている。そこから誇りが生まれてくるとは思えない。

ところで先日、札幌国際音楽祭の取材番組を見た。この音楽祭は世界中から若手の音楽家を集めてオーケストラを結成し、当代一流の指揮者を招いてコンサートを開くという企画で、若い音楽家を世界に羽ばたかそうという夢のある取り組みだ。選ばれた若者たちは4ヶ月、それぞれのパートで世界的な指導者について訓練を受ける。そして最終日、指揮者の下に総仕上げをする。6時間に渡るリハーサルで今年の指揮者は、「想像力を動かせ」「イメージを深めろ」と繰り返して若者に伝えていた。こうして、芸術家としての命を吹き込まれて、本番となる。

終わった後のインタビューで、「今まではミスをしないうか、うまくやれるかばかり考えて緊張したが、今日はそうした緊張ではなく、自分の中からわき出てくるイメージを生きていくことができた、それを表現できることの喜びに浸れた」と語る若手音楽家があった。天才指揮者の世界となせる技であるが、人間にとってのイメージとその表現がいかに誇り高いものか感じさせられた。

想像力、イメージーションというのは突き詰めれば、みえないもの、超越の存在や大いなる存在に対する想像ということになるのではないか。そうしたものを無視し、それらを育もうという姿勢がないと我々の心は急激に卑しくなってしまうような気がする。

ひれ伏す何ものかを失った時、そびえ立つ傲慢は天を突き抜けるかのようだ。想像力は失われ、心優しい空気は消滅する。我々は障害者や高齢者を、福祉現場を利用して排除し管理するといった暴力が行われよう注意深く意識していなければならないと思う。そのためにも、問題対策の為だけのアセスメント、ケアプランといった、一神教の神に成り代わったかのようなプログラム一辺倒ではなく、同時に想像力、イメージーションを鍛え、目には見えない心やたましいを見失わないようにしていきたい。

編集後記

『現実的な距離はあっても、実は深くつながっている』 そう思った瞬間があった。グループホームに入居するある方に、家族が面会に見えた時見せたあの笑顔。笑顔なのに、少し目を潤ませていた。この笑顔は何とも奥深い。

私は里で「つながり」を頼りに時を過ごしていると思う。目に見える「つながり」もあれば、目に見えない「つながり」もある。それを感じることができるか。それを見つめる視点を持つことができるか。些細なことのように、実はものすごく大切なことのように思う。

節足を迎え、この一年を振り返る。目を閉じ、頭に浮かぶのは何だろう。この一年もいろいろあった。来年はどんな年になるのだろうか。それでは、また次号…。

あまのがわ通信

2006 12月号

里のひとこま

11月末～12月初

里は今こんな風に動いています…

編集 銀河の里広報委員会
代表 清水康宏
発行 銀河の里
〒025-0013
岩手県花巻市幸田4-116-1
TEL (0198)32-1788
FAX (0198)32-1757
E-mail:yuyu @ mx51.et.tiki.ne.jp



「飲まねっか？」
「にやああ」



小豆の穀剥きに
Sさんも巻き込んでしまう。
いつの間にか小豆を囲むテーブル。



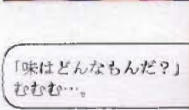
去年から漬けたく
て、念願叶った芭
蕉葉の香漬け。
悪いと共に深い味
わい？



サテライト(本館で)で
獲れたキャベツが皆の
期待を背負って針に
乗る。



大根収穫！
なぜかこの季節の大根
は、煮たり、漬けたり
ひときわ美味しい。



「味はどんなもんだ？」
むむむ…

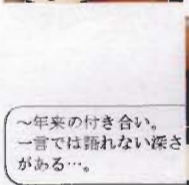


誕生会のケーキは
手作り！
でも、主賓がケーキ
を切り分ける？

「ケーキできたよ！」
「じゃ、たいしたもんだ！」



「平成18年産小豆」
しっかり保存…



～年来の付き合い。
一言では語れない深さ
がある…



サテライト(本館で)に干し柿が
吊される。鴉(からす)が心配。



晴天のもと、収穫へ。確かなてごたえ！



軒のとりあい！
よく突き手が替わる。
里恒例の餅つき



埃をかぶっていた
はた織機を
Yさんが動かし
始めた。

勢揃いの忘年会！
カラオケのあの歌声が耳に残る…



冬を前に稲刈りを思う



私は、里に来て4年目になる。一年目高齢者による稲刈りが手刈りで行われたがその場に立ち会うことはなかった。次の年、今年も手刈りをするのかと期待したが、「イベントでやるつもりはない、やる意味が見いだせない。」デイサービス(DS)の主任からストップがかかった。そのときは、その真意を計りかねていた。翌年、つまりは昨年グループホーム(GH)2棟と、DSの利用者とスタッフ総出で田んぼに出た。天気にも恵まれ、やるぞと張り切っていた。その理由は、“kさんと稲刈りをする。”“田んぼでのkさんを見たい。”という思いからだ。そして、田んぼに立つkさんに私たちは魅せられた。「いいか、こうやって、ひょいとやってひょいとやってひょい」。あつという間に稲はまとめられ、

畦めがけてポン。見事に弧を描き飛んでいく。その隣で習うスタッフ、田んぼは生き生きと動いていた。

そして、今年私には特別の思いがあった。稲刈りの話を持ちかけると、「収穫祭の餅つきに使う分を高齢者で手刈りしませんか」と話が出る。「もちろんやりたい」そして去年は機械が先に入ってしまったが、今年は、田んぼに先にはいるのは機械ではなく、“人”でありたいと思った。ここまでこだわるのは、「働くことは傍を楽にすること」と語るSさん「他人の米は食べません。百姓ですから。」と語るkさん、去年私たちにその生き様を稲刈りを通して見せてくれたお二人が、今年の稲刈りをする事なく他界されたことが大きかった。今年の主役は誰になるのか?そんな思いもあった。今年、ちょうど休みに当たり、準備から携わることができた。DSの主任が、田んぼに降り手前を刈り始めた。高齢者が田に入りやすいようにだと理解できた。私も鎌を持って田んぼに降りた。稲を刈りながら、わくわくしている自分に気づいた。初めて、本当に稲刈りを経験した思いがした。田んぼでは、高齢者に混じって、生き生きと手を動かすスタッフの笑顔があった。ワークステージの若者も駆けつけ、機械が入ることなく、すべてその日のうちに手で刈られ、はせに掛けられたのだった。

“ねばならない”確かに“ねばならない”けどそれは、作業をしなければならないではなく、kさん、Sさんが見せてくれた“生き様”を次の世代に“伝えねばならない”と強く感じている。私は、コンビニのおにぎりを食べるときに簡単さ、便利さをありがたいて思ってきたが、そこにも自然の恵みがあると感じた自分がある。先達の方々の暖かいまなざしを感じながらそうあり続けたいと願っている。(板垣)



Sさんの贈り物

先日デイサービスでのこと、SさんがKさんに手編みのくつ下をプレゼントした。Kさんは「ありがとや〜、お金払うからな〜」と喜んだ。Sさんは「いいの、いいの。これでこことここをつなぎましょう。」とにっこり、でも少し厳しさも備えたような表情で言った。

Kさんは、最近、長年のデイの仲間であったTさんとお別れもあり、孤独や不安を抱えていた。物忘れも目立ってきて、在宅生活が継続出来るかどうかのケース会議を持つなど、注目していた所だった。

Sさんは、このところ風邪をひいて食欲がなく、出された食事を前にため息をついていたのだが、なんとか平らげて「始めは食べたいと思わなかったけど、皆さんと一緒にだから、全部食べられた。家に1人でいると食べられなかったよ。」と語った。家で1人で食事をする寂しさを抱えたSさんだからこそ、人と人が共に生きることの喜びや大切さを伝えてくれる。また、編み物・縫い物が得意で、毎週のように座布団や、手編みのチョッキだとかくつ下を作っては、誰かにプレゼントするのを楽しみにしていた。

この間、KさんがSさんに言った。「おばあちゃんがくれたくつ下な、大事にタンスにしまっておいてあるんだ。勿体なくて履かれない。見るだけ見て、嬉しくなってまたタンス開けるの。あははは。」と気持ちよく笑って話した。Kさんがくつ下の事を覚えていた!私達は、Kさんはきっと忘れてしまうと思っていたのに、そんな心配は杞憂だった。

KさんにとってSさんは、単なる“くつ下をくれる優しいおばあちゃん”ではなく“自分の存在をしっかりと受け止めてくれる人”としてKさんのところに入ったのだと思う。

Kさんは、普段は午前中に話した事も翌日にはすっかり抜けてしまうのだけど、今回、Sさんのこととちゃんとつながったのだ。Sさんが編んでくれた暖かくつ下は、タンスに入れておいても、Kさんをしっかりと温めているのだと思う。(牛坂)

ワークステージ居酒屋出店計画

今年四月施行の自立支援法の理念は「障害者が社会に出て働く社会を作るべきで、福祉施設に閉じこめておくべきではない」という打ち出しで、いかにも障害者の気持ちを反映したように装ってはいる。しかし法の整備は、現状を無視して唐突すぎる。本音は障害者のことよりも、社会保障費の減算が第一の目的で、福祉が切り捨て安い伝統に乗った安直な対策であったことは間違いない。

結果、利用者は通勤費を払ってまでは通えない人や、これまで仕事として会社にきていたつもりが利用者意識として下がった人など、それぞれに急激な負担と変動が強いられてしまった。施設は人手を減らすしかないが、それではきちんとした対応はできないことも現実である。「施設は不要、社会へ出て働け」ということが、一律すべての障害者に正しいとは限らない。社会へ出て行くときも、出てからも、一人一人をいかに支えるのかは重要な問題であるはずだ。そこには就職指導といった強化がなされるだけで、心理的な支えや細かい障害別の守りは語られない。まるで機械かモノのように扱えば済むかのような単純な発想は、制度設計としてもあまりに甘すぎる。

制度がどうであろうと現実を生きていくしかないのだから、我々は施設をあげて捨てる覚悟で、出店を企画している。生産をし、売り上げを伸ばし、利益を出す以外に生きる道はないのだ。それが日本の福祉が選んだ道なのだから文句ばかり言っても仕方がない。

しかし地方の街には人が歩いていない。お客さんは来るのだろうか。全く不安である。それでも障害者の働く場や、生産したものを販売する場所がほしい。暗い街も明るくてにぎやかになってもいい。福祉が街に出ていくことでいくらかでも役に立てれば嬉しいことだ。残念なのは行政からの支援が全くないことだ。支援法には自立支援の責任は自治体と明記してあるにもかかわらず市の態度は鈍い。後は市民の皆さんの応援に頼るしかない。いい店を作って、お客さんにたくさん来てもらいたいと願っている。障害者が働ける場が増えると共に、その場が、心優しい社会を作っていく核となれたらもっといいと思う。お店は来年1月20日開店の予定である。

(宮澤)

積まれた私



11月、Fさんの91歳の誕生日。手作りのお弁当御膳を作った。里の皆で手がけた野菜を使う。歯のないFさんが食べやすいメニューを考える。大好物のウナギを入れる。料理をするにはいろんな事を考え、作る。その課程の根本には愛情が存在していなければ成り立たないと思う。

情などなくても生きていける便利な世の中かもしれない。感情、愛情、情熱……。里の中でさえ非情がある。せつなく収穫まで

に至った野菜が腐っていたり、淋しい事も起こる。

プロならば、職人ならば、大人ならば、芯に熱いものがあり、訴える何かがあってにじみ出てくるものと思っていたが、今はそういう大人と出会いにくい。車の故障を見ぬけない整備士、数年で雨漏りをする屋根、はがれ落ちる外壁、投げやりなケース会議等々。社会全体から職人の技、姿勢、情熱はどこに行っただろう。

一昨年、去年、今年のFさん、振り返ると思いがつのつてくる。Fさんの人生との出会い。この日、この瞬間に掛ける思いは、強くなり、その思いが表現として、弁当という形になった。その弁当を困んだ昼食に、予期せぬHさんがデイを訪れ、祝いの歌を歌ってくれた。予期せぬ立派な挨拶をYさんは述べてくれた。役者が偶然だが揃った。思いや情熱があると、予期せぬ事が起こる、偶然が必然の様に起こる。そうそうこの感じ、この感じが面白い。先日Fさんから「頼んだよ」とスタッフを介して伝えられた。いったい何を私は託されたのか、とても大事なことに違いない。

(戸來)